

特別
記事

イギリスの日本人学校から 日本の英語教育への提言

移りゆく時代とともに27年、ロンドンでグローバル人材を育成

イギリスの首都ロンドン郊外の緑豊かなバッキンガムシャー州に位置する「帝京ロンドン学園高等部」は、文部科学省の認定を受けて1989年に創設された、日本国外に居住する日本人のための一条校（学校教育法第1条に基づく教育施設）だ。創設の背景にはバブル景気における日本企業の盛んな海外進出があった。同学園は開校当時よりイギリス在住者以外の単身留学生の受け入れも積極的に行ってきたが、バブル崩壊後の現在、生徒の約6割が単身留学生である。その多くが、「国際的な環境で質の高い英語教育を受けさせたい」という保護者の期待と希望を背負って、日本からはるばるやって来るという。イギリスの歴史ある日本人学校から、これからの日本の英語教育のために学ぶべきことを探る。



帝京ロンドン学園高等部における 英語教育の枠組み

「ロンドンにある学校」と聞くと生徒の英語力が非常に高いイメージを持つかも知れない。だが、帝京ロンドン学園高等部の場合、入学時の生徒の英語力、そして言語のバックグラウンドには、相当の幅があるという。

「英語圏の現地校に通った経験のある生徒、保護者の赴任のため、英国だけでなく海外に居住している生徒、さらには北海道から九州まで日本全国から英語が苦手な生徒も集まります」と関根彰子先生は話す。

英語以外の教科の授業は日本語で行われるが、英語教育に注力しているため、英語科の授業数は週10時間と多い。そ

のうち2時間は日本人教師が英文法を中心に日本語で教えるが、これは「日本人にとって、英文法は日本語で学ぶ方が効率的で実践的」という考えに基づいている。そして、「英会話」や「英語演習」などは英国人の先生方が、日常会話からアカデミック・イングリッシュまでを網羅する。

卒業後はイギリスの大学に進学する生徒もいるが、多くの生徒は帰国し、日本の大学に進学する。そのため、日本の大学入試を意識した授業が行われており、生徒には「卒業時まで、英検準1級または2級を取得すること」が推奨されている。

つまり、同学園の英語教育には、英語環境に恵まれた海外に位置するという特別な側面と、日本人に特化した英語教育という、2つの側面があると言える。

「多感な思春期の3年間を本校で過ごし、考え学んだことがいずれ日本に戻り高

等教育での学業につながり、そして将来は日本を背負う人材になってもらいたいという思いでいます」と関根先生は願う。

知識と社会をつなぐ 体験型学習を重視

同学園はロンドンにあるとはいえ日本人学校であるため、日本語だけでも学校生活を送ることができてしまう。そこで「日本人村」になってしまわないよう、イギリスにあるという環境を生かした体験型学習を重視しているという。

例えば関根先生の受け持つ英国史の授業では、議会制制度を学んだ後にはロンドン中心部へ出かけ、国会議事堂を見学する。また、ロンドンの地下鉄で配布されている無料新聞やBBCニュースなどの生きた教材を活用し、「イギリスはEUから離脱するべきか否か」といった時事問題も日常的に取り上げる。

「机上だけではなく、英語を社会や体験と結び付けて学びます。それが生徒たちの知識を広げるだけではなく、ものを考える力を育むのです」

英国史だけではなく、体験学習には世界史、政治経済、美術などの各教科が連携し、全学的に取り組んでいる。

日常的に行われてきた アクティブ・ラーニング

イギリスは多民族国家であり、各自の

異なる文化や宗教的な立場から、一人一人の意見が求められる。主体的に物事を考え、発信する力を育む「アクティブ・ラーニング」はイギリスではいわば必須であり、関根先生も「意識はしていませんでしたが、これまで積極的に取り組んできたことは、必然的にアクティブ・ラーニングだったと思います」と振り返る。

例えば各教科の授業は、ディスカッションやプレゼンテーションで展開する。英会話の授業では、生徒が自分の意見を英語で発表することは、当たり前のように行われてきた。英国史の授業においても、教科書に沿って史実を読み上げるような、受け身の授業は行わない。

「例えば、『1066年、フランスの貴族がイギリスの王様になりました。もしあなたが王様なら、これから敵がたくさんいるところで、何をしたらよいでしょうか?』などと問い掛け、生徒に考えさせます」

ただし、日本で教育を受けてきた生徒は、こうした能動的な活動にすぐになじめるわけではないという。

「日本人の“横に並びたがる気質”もありますから、まずは意識変革が必要です。場数を踏んでいけば、生徒たちは飛躍的に変わっていきますね。その成果は授業だけでなく、生活にも現れてきます。例えばやりたい部活がなければ、生徒は自らクラブを作ったり、そのためにはどこにコンタクトを取ればよいか、どうしたらよいかを考え、自ら行動するようになります」と関根先生は生徒の成長を喜ぶ。

英語を話す必然性は 教師からプロデュース

英会話の授業では、日本語で話し始めてしまう生徒がいる。関根先生は、「英語を話さなければいけない必然性は、教師から生み出すことが大切」と訴える。

「日本人にとっての英語は『外国語』。学習言語と日常言語のギャップが大きく、それを埋めるのが今の教育の課題です。そのためには、十分な時間と適切な学習が必要です。英語が『第二言語』として生活や教育現場で話されているインドやアフリカのような国とは異なる教育が必要です。『日本語禁止』『オール・イングリッシュ・デーを設ける』など、生徒にとって英語が話せないと心地悪い環境を用意し、緊張感を与えることもその1つです」

英語教育を変えるには まずは教師自身が変わる

関根先生自身も、かつては日本の公立学校で、古典的な文法訳読法で英語を教えていた。だが、留学と渡英をきっかけに、自ら英語教授法を抜本的に改革してきた。その背景には、「このままではこれ以上成長できない」という危機感、そして「英語教育を変えるのに最も大事なのは、教師自身が変わること」という、“気付き”を身をもって知ることができた。

「英語科の教員がいかにかのの仕事や生徒指導だけでも忙しいか、自分が受けてきた英語教育が最良のものとして信じて疑わず『一国一城の主』になってしまいがちか、よく分かります。ただ、時代が変わっているのに、教育が変わらなくてよいなんてことはあり得ません。『縁あって親子』という言葉がありますが、縁があって生徒さんと出会い、大切な思春期を一緒に過ごします。人生のたった3年間だけです。親ではなく私たち英語教師だからこそ伝えられることがあります。それは教師としての義務でもあります。関根先生は自らの経験から得た思いを語る。

そして、「自らのトレーニングをせずに、未来を担う生徒と向き合うことは許されません。他の先生の講演を聞きに行く。先生たちのネットワークに入る。インターネットで調べる。できることはたくさんあります。私もロンドンで、『英語情報』は毎号、隔々まで読み込んでいます。日本の英語教育を変えるために、自ら前進しましょう。そして学びを通じ成長することを楽しみましょう」と読者に向けてメッセージを送った。



帝京ロンドン学園高等部 関根彰子先生